ギュンター・グラス：「言わなければならない事」を巡る諸問題

小林宏晨

はじめに

ある評論家から「永遠の反ユダヤ主義者」[1]と呼ばれたノーベル文学賞受賞作家ギュンター・グラスは、二〇一二年四月四日、欧州三紙（La Republica, El Pais, Süddeutsche Zeitung）に「言わなければならない事」のタイトルで散文詩を同時発表した。その内容は、とりわけドイツのメディアと政治の強い主に拒否反応を引き起こした。本稿は従って、それらの反応の性格、その背景を探り、戦後ドイツの心理的状況も、可能な限り確認を試みたい。

Ⅰ．発表方式

グラスの詩をドイツで最初に発表した『南ドイツ新聞』（SZ）は四月四日文化欄の一面にコメントなしに掲載した。同紙は、後に関連記事を掲載したが、グラスによって選ばれた弱みからか、批判的記事を回避した。これに対し週刊紙Zeit紙は詩の内容を確認した後、掲載を断った。[2]

南ドイツ新聞と同日発表したイタリアのLa Republica紙は、同時にグラスの事実誤認をあからさまに指摘した論説と批判的コメントを掲載した。[3]

ドイツの公共放送第一テレビ（ARD）は、中近東の専門家のコメントも例示することなく、グラスにこの『詩』を朗読する機会を提供した。[4]

ドイツのメディアでは、前記の例外を除いて、バランスの取れた報道がなされた。とりわけ『Spiegel誌』、「Zeit紙」、「taz紙」、「Welt紙」、「Bild紙」、『FAZ紙』等の大メディアは、グラスに対する「作法の環」を形成した。[5] これに対し新聞読者の調査では、急進左派と急進右派がグラスに賛同している。[6]

Ⅱ．内容紹介

ここでは主に、クレメンス・ヴェルギンの「ギュンター・グラスの事実への奇妙な関係」[7]を参考にし、グラスの詩の内容紹介を試みたい。

グラスの詩は、「ゆがみ」と『生半可な事実』と『嘘』で固められているといわれているので、氏の言明に対する事実チェックが不可欠と考える。

実際にグラスの作品では、その動機が疑わしいばかりか、事実に対する奇妙な関係も表現されている。[8]

何故に私は沈黙するのか。長すぎた沈黙。
公然と、しかも図上作戦の中で
演習され、その終わりに生き残る
われわれとて、高々『註』[9]に過ぎぬのに。

主張されたる第一攻撃権は、
アジテーターに支配され、
組織的な熱狂へと操作された
イラン人民を消去る事が可能だ。
権力領域内に原子爆弾を構築
している事を推定するならば。

これは全く事実ではない。「第一攻撃」の概念は、冷戦の核対決から発生し、核の予防攻撃の意味である。この概念をグラスも使用している。つまり、「イラン人民を消去り得る攻撃」とする。しかし現実にイスラエルは、核の第一（事前）攻撃の核ドクトリンを有していない。

イスラエルは、如何なる公式の核ドクトリンも有しない。何故なら、他の諸国に核武装を強いる事がない為に、自国の核兵器保有を公に認めないからだ。しかもイスラエルのどの政治家もイランを核の第一攻撃で威嚇していない。[10]

図上作戦は存在しない

イスラエルの兵器庫にある核兵器が防御的性格とされ、抑止に奉仕する。つまりイスラエルへの大量破壊兵器を伴った攻撃に対し、高々第二撃（反撃）用兵器として投入される事が再三にわたって表明されている。『明らかに、しかも図上作戦の中で演習される』とは全く根も葉もない主張とされる。

グラスはイランの核施設へのイスラエルの攻撃が核兵器で遂行されると言う最初の誤謬に陥っている。この誤謬に反し、しかも知られる限り、核の予防攻撃は、周辺諸国によって全く考慮されていない。それに代わって、通常劣化ウランの弾頭を有する地下壕破壊爆弾の出動が論じられている。

この素材（劣化ウラン）が何らかの核爆発を行うからではなく、通常爆弾が爆破する前に、運動エネルギーを伴っ

て厚いコンクリート壁に進入する状況にある、とりわけ厚くかつ重い素材であるからだ。グラスはこの素材を検討する初歩的努力さえしていない。

既に詩の発端で、イスラエルから発せられる危険を誇張し、イランからイスラエルに向けられた危険を些事に見せかけるグラスの意図が認識される。何故なら、イラン政権が爆弾を製造するのではなく、イラン人民の「権力領域で原子爆弾が推定され』、しかも製造者と意図が不明確に留められるからだ。[11]

フセインは演じただけ

イランのアーマドネジャド大統領は、当然危険な政治家とされていない。彼はホロコーストを否定し、イスラエル国家を抹殺で以て脅し、しかもこの政権は、この目的の為に、ユダヤ国家を威嚇しかつ攻撃する為に、数十年以来、この地域における平和を望まないテロ諸勢力を高価な兵器を以て装備している。

アーマドネジャドはグラスにとって、単に演じるだけの本気でない、「アジテーター」に過ぎないのだ。同様にイラクのアジテーター、故サダム・フセインも演じるだけとして、実は一九九一年の湾岸戦争に参画しなかったイスラエルに、そのミサイルで狙い撃ちした。それでもギュンター・グラスは、当時もイスラエルを冷たく扱った。[12]

しかし何故わたしはかの国を名指しで

呼ぶ事を自らに禁ずるのか？
かの国では長きにわたり、秘密裏に、
核の潜在力を増強し、利用可能にし、
しかし統制が及ばない、如何なる検証も
可能でないからなのか？

グラスは多分特別のニュースソースを持っている

イスラエルの核兵器が数年以来増大している事をグラスがどのようにして知っているかは知られていない。多分氏は特別のニュースソースを持っているかもしれない。イスラエルの核兵器が「如何なる検証も可能でない」事は、単純な根拠を有する。つまりイスラエルは、イランとは異なり、核不拡散条約を調印していないので、その規定に拘束されない。これに対し、イランはこの条約当事国であるにもかかわらず、しばしば、しかも継続的に違反している。

しかしその事はイスラエルの核兵器がグラスの主張のように、『統制下にない』ことを意味しない。フランス、イギリス及びアメリカの核兵器と同様に、イスラエルでは核兵器が極めて綿密な技術的及び政治的統制メカニズムを有する確固たる民主体制下にあるが故に、『統制外』にあるわけではない。[13] 強いて言えば、諸外国と国際機構の「統制外」と言う意味ならば正しい。

私が沈黙に従って来た
構成要件について全く黙すという事は
わたしに重荷を負わせる偽りと感じる。
これを無視すれば刑罰を見込む強制と
私は感ずる：
「反ユダヤ主義」の弾劾は周知のこと。

これは全くの偽り

これも全くの偽りである。これを確認するには記録の調査で十分だ。イランの核プログラムの取扱に際してイスラエルの核爆弾を指摘し、しかも両ケースの主張される差別的扱いを批判するか、あるいはイランが恐怖の均衡の創設を目指していると主張する事が最近ドイツでエチケットに適っている。

「全く黙する」などと言う事はあり得ない。しかもギュンター・グラスが行うように、諸事実をかくも公然と選択的かつ扇動的意図を以て調整する者のみが「反ユダヤ主義の弾劾」に晒されることになる。この様な場合には、この非難は正しいと看做される。[14]

しかし今や空前の

未曾有の犯罪が我が国
によって行われ、
事につけては指摘され、釈明を求められ、
再び、しかも純粋な取引として、たとえ、
滑らかな唇で[15]補償と宣言されようと、
更なる潜水艦がイスラエルに
納入されるべきとされる、その特殊性は、
全てを抹殺する弾頭が
唯一基すら核爆弾の存在が証明されず、
しかもそれが証明すべき疑惑ありとされる
場に向かって配備されているので、
わたしは言う、言わねばならない事を。

グラスはあるトリックを利用

グラスは、パウロ教会での講話におけるマルチン・ヴァルザーと同様に、ドイツが『時折』そのナチスの過去に「追いつかれ」、しかもその為の『釈明を求められる』事が不満なのだ。従ってグラスはあるトリックを利用する。読者は「再びしかも純粋な取引」の記述をホロコースト非難との結びつきで読む。

つまり誰かが取引をする為に哀れなドイツ人に圧力を試みる。グラスを守る者達は、取引が潜水艦に関わっている事を指摘できる。

実際にこの詩は両言明に関わっている。何故ならグラスは、全てをコンマのみを以て相互に分離しているからだ。ユダヤ人達は、潜水艦を安く買う為にドイツ人達に良心の呵責を強いる。ドイツは実際に潜水艦に補助金を出した。

この取引は「滑らかな唇で補償と宣言された。」これもまた、ガサツな歪曲である。実際に、イスラエルは、補助された潜水艦の最初の納入をドイツ再統合後の補償と見做した。何故なら、ドイツ民主共和国が再統合まで補償金を支払わなかったからだ。[16]

「滑らかな唇」とはかけ離れて

これを批判する人もしない人もあり得る。しかしこれは、「滑らかな唇」とは遠くかけ離れた複雑な道徳的・歴史的事項なのである。

グラスは再びイランの「証明されない」（推定される）原子爆弾と述べる。氏はイランの核プログラムの軍事次元に関する国際原子力機構（ＩＡＥＡ）の最近の二報告を読まなかったらしい。報告には核爆弾プログラムへの指摘が極めて多いので、その後挙証責任は既に反対側（イラン側）に転換していると看做される。

イランは民間用でなく、軍事プログラムに必要な全ての部品が如何なる意味を生ぜしめるかにつき説明する義務がある。イランのトップ外交官が初めてイランが核爆弾完成間近い事を追認したニュースがドイツに到着した丁度その日に、グラスの詩が発表された事は歴史の皮肉である。[17]

ＩＡＥＡ報告をグラスは知る必要があった

この事実をグラスは、その詩の作成の際に知る事ができなかった。しかし氏は、かくも容易に反論され得る諸主張を設定する以前に、このＩＡＥＡ報告を知る必要があった。

しかし何故にこれまでわたしは沈黙したのか？
わたしは考えた、決して消去れない
汚点に取りつかれたわたしの素性が
わたしが密に結びつき、これからも
結びつきを変えないイスラエルに
この事実を明確な真実として突きつける事を妨げた。

グラスはここで、自らの（ドイツの）「素性」の『汚点』が実際には平然たる嘘の集積から成るこの「真実」を宣言する事を妨げると書く。しかし氏のこれまでの沈黙と現在の詩に対するグラスの動機を究明する事は極めて難しい。[18]

ある種の相違

氏が人目に立つ事を妨げたものは氏がドイツ人である事ばかりではなく、永い間沈黙してきた「武器親衛隊」のメンバーだった事実でもある事は明らかだ。人が生まれた事と人が自ら行った事の間には当然ある種の相違が存在する。

この詩から、再びグラスの排除意識が表明されている。グラスがイスラエルに密に結びつき、しかもこの結びつきを変えようとしない事は、自己保護主張として全く無視する事が許される。

一九九一年の湾岸戦争時におけるグラスとイスラエル作家ヨーラム・カヌイクとの論争を思い出す者は、グラスがこれまでイスラエルと密に結びついた事があるか、あるいはイスラエル人に共感を覚えていた事は確認できない。[19]

何故わたしは今さら言うのか
年老い、しかも最後のインクで、
核保有国イスラエルは、そうでなくても
壊れ易い世界平和を危険に晒すのか？
既に明日では遅すぎるかもしれない
事を言わねばならないから、
更に—多大な責任を課せられたドイツ人として—

われわれが犯罪の納入者になりえるから、
何故なら、われわれの共同責任は如何なる通常的
言い逃れによっても
消去ることができないから。

墓場の縁で

これは、グラスの詩の中で最も陰険な部分だ。ここで人は、墓場の縁に立ち、最早失うものが無く、しかもその政治的遺言を設定するジェスチュアが示された。これは、いやらしく悲想である。

しかし氏の「核保有国イスラエルは、そうでなくても壊れ易い世界平和を危険に晒す」は、「犯罪の納入者」（ドイツ）と共に一つの意味を生ぜしめる。氏は、イランに対するイスラエルの核攻撃となかんずくこの核兵器の発射台として奉仕するイスラエル潜水艦の納入者としてドイツがこの「犯罪」の共同責任者となる事に警告を発するのだ。

しかしここでグラスは、この潜水艦の意義を理解しようとしない。これらの潜水艦は、周知の如く、イスラエルに対するイランの核攻撃の場合の第二撃力の維持を目的としてイスラエルに奉仕する。

イスラエル領土が狭く、攻撃者がイスラエル全土を一撃を以て効果的に破壊し、地上核ミサイルが最早報復攻撃で

きない危険があり得るからである。しかもその場合には再び相手の核攻撃の蓋然性を高める事になる。[20]

古典的抑止論理

つまりこれらの潜水艦については、グラスが当時も理解しなかった冷戦からの古典的抑止論理が重要なのだ。グラスの主張通りとすれば、西側は欧州で（中距離ミサイルの）追加武装を行わないこととなり、全東欧ブロックは多分今日でもソ連の圧政下に留まったであろう。

合理的に行動する国は、これらの兵器を実際に投入する為にではなく、対立側の大量破壊兵器使用を抑止する為に、核の第二撃力を確保するのである。（この点については、日本の左派勢力も、グラスと同様の誤謬に陥っている。）

イスラエルは、（常時イスラエルに対しその抹殺の脅しを掛けるイランとは異なり）、これらの兵器を第一撃の為に投入すると脅した事は無いし、イスラエルで誰かがこの脅しを要求した事も、あるいは、このような図上作戦も知られていない。つまりグラスによって示唆されたシナリオは、全く証明されない扇動的憶測に他ならない。[21]

イスラエルのことは心配せず

潜水艦に装備された兵器の投入で考えられる唯一のケースは、第二のホロコーストを生ぜしめ得る大量破壊兵器を伴った対イスラエル攻撃であろう。しかし、勿論グラスは攻撃対象イスラエルの心配をしているのではなく、これに

対するイスラエルの反応が心配なのである。

しかも同意する：わたしは最早沈黙しない事を、
何故ならわたしは西側の偽善に
うんざりだから：しかし希望は持っている、
多くの人が自らを沈黙から解放し、
認識可能な危険の原因者に
武力の放棄を迫り、しかも
同様に、イスラエルの核戦力と
イランの核施設の
国際機関による
阻止されない、恒常的統制が
両国政府によって許容される事に
固執するように。

ここでグラスは、イスラエルのみを「認識可能な危険の原因者」と表示する。氏は、この詩のどの場所でもイランから発せられる危険をテーマとしていないからだ。しかもこの危険は、グラスが再三にわたって示唆しているように、

イスラエルが「イラン人民を抹殺できる」ところに存在する。これは、近東における事実の完全な転換である。[22]

いかな拡大欲求にもあらず

イスラエルが四〇年以上にわたって核爆弾を保有していると推定されている。それでもなお周辺の部分的には敵対的諸国は、（イランと同盟するシリアを例外として）、決して同様に爆弾を持つことを深刻に強いられているとは感じない。

何故ならこれらの諸国は、イスラエルがこの地域で拡大欲求を持っていない事を知っているからだ。しかもイスラエルの爆弾がアラブ諸国の目からして、防御的役割、つまり自衛を目的に指定されているからである。

イランの爆弾はこれと異なる。昨年サウジアラビアのトゥルキ・アルファイザル公は、三回にわたって公然と「イランが爆弾を持つ場合に、自国も同様に持たざるを得ない」と発言した。イスラエルの場合における四〇年間にサウジはこのような意識を示すことはなかった。

そのための根拠は明瞭である。イランは数十年以来この地域を不安定化する役割を演じ、更に覇権的傾向を示す重要な役割を演じている。しかもイランは、近東ばかりか全世界でテロ組織、民兵、反乱集団を支援している。[23]

最大危険としてのイスラエル

実際にイスラエルの爆弾は、次の政権が権力を掌握しても、はるかに心配が少ない。グラスは両国を同値せず、否、イスラエルをより危険と看做す。

この地域における事実的所与をかくも無視して主張する程に、人は目暗で、無知でかつ全き執着を持ち得るものだろうか。国際法が国際監視をイラン自身に義務付けているにも関わらす、グラスがイスラエルとイランの核施設を同様に国際統制下に置こうとする事は法的相違の無視を意味する。

こうにしてのみ、全てのイスラエル人と
パレスチナ人を、いやそれ以上に、
狂気に支配されたこの地域に
密集して敵対的に生きる全ての人々を、
そして究極的にわれわれをも救うことができる。

人は、この詩の終結部分を読んで、グラスが完全に老人性痴呆になったのではないかと自問する。この詩の全体は、イランとイスラエルを扱う。しかも氏は、イスラエルとイランの核施設の国際統制がパレスチナ人達を助けることができると主張する。この事は、イスラムジハードとハマスがイランの財政支援を受けている事実以外にどのような関

係にあるというのだろうか。[24]

近東に関する欧州の型通りの言いぐさ

これがテーマに所属するか否かに関わりなく、パレスチナ紛争が不断に考慮されなければならないとの主張は、近東演説における欧州政治家の型通りの言い草となっている。パレスチナ人を彼ら自身の為に引き受けるのではなく、ユダヤ人に対する責任コンプレックスから逃れ得る為にドイツ人は、別の価値としてこれを受け入れているようである。

結論として、この詩は、グラスの全面的駄作の明らかな基本傾向なので、（責任）排除の大御所グラスが終わりに再びドイツの責任処理のエバーグリーンに回帰する事は首尾一貫しているように思われる。[25]

Ⅲ．メディア評論家の反応

ヘンリク・ブローダー

メディア評論家ヘンリク・ブローダーは、Welt紙の中で、「ギュンター・グラス：全く正常と言うわけではないが、詩人なり。[26]」のタイトルで以下の様に論ずる。

ギュンター・グラスは、イスラエルとの問題を抱えていた。しかし、これまでイスラエルとイランに関する詩『言

わなければならない事』ほど明確には発言したことがなかった。

「何故に、私は沈黙するのか。長過ぎた沈黙を」

囚われない読者は、グラスがついに、何故に「武器親衛隊」に於ける活動について今まで沈黙していたのか説明するのかと考えるかもしれない。しかしそうではない。詩人たる道徳主義者は、とっくにこの時期を越えている。今回は、彼にとって、厳しい生き残りの問題なのだ。[27]

「主張されたる事前攻撃権」

グラスは最早沈黙する気が無い。この爆発のきっかけは何なのか。名もなき国の「主張されている先制攻撃権」は、アジテーターによって統治されるイランを危険に晒す。

グラスは、自らに沈黙を命じた。何故なら、氏は、反ユダヤ主義者のレッテルを貼られる危険に陥りたくなかったからだ。[28]

「タブー突破への口頭前戯」

しかしこれは、破滅を阻止する詩人の責任を以て正当化されるタブー突破への通常の口頭前戯なのだ。

グラスは何時も大狂気の傾向を持っている。しかし今や完全な狂気に至る。脆弱な詩の作成との取組みの中で氏は、イラン大統領の多くの演説を全く理解しない。イラン大統領はパレスチナを占領するイスラエルを、摘出すべき「癌腫瘍」と表示する。グラスにとってイラン大統領は真面目に取り上げるべきでない単なる「アジテーター」に過ぎない。イランでは投入されるべき唯一つの「核爆弾」さえ、投入されるまでは、「証明されていない」からだ。この様な場合、グラスは犠牲者を悼み、しかも生き残った人々に慰めを授けるであろう。何故なら、氏はイスラエルと緊密に「結ばれている」と感じるからだ。[29]

「ユダヤ人との問題は古くから」

グラスは、自らの沈黙を破る。何故なら再び共同責任を担いたくないからだ。何故なら、グラスは、「西側の偽善にうんざりしており」、しかも強制された沈黙から自らを解放し、危険の原因者に武力の放棄を要求し、「同様に、イスラエルの核戦力とイランの核施設の国際機関による阻止されない恒常的統制の両国政府による許容を要求する。」事を希望するからだ。

イスラエルが『核戦力』を有しているに対し、イランは多分電力生産に奉仕する「核施設」を有しているに過ぎない。「明確な危険」の原因者は、統制から逃れているイスラエルであり、自己の核施設を国際監視に開く事を好まないイランではない。

グラスは何時もイスラエルとの問題を有していた。しかし今回の詩はこれまでの問題を上回っている。グラスは、

二〇〇一年一〇月シュピーゲル誌のインタビューでパレスチナ問題の解決について次の様に述べた。

「イスラエルは、占領地を明け渡すだけでは十分ではない。パレスチナの土地の占有もその居住地の占有も犯罪的行為である。これは中止されるばかりか、返還されなければならない。さもないと平和は帰ってこない。[30]」

テルアビブとハイファは放棄されるべき

グラスのイスラエルへの要求はナブルスやヘブロンばかりかテルアビブやハイファも放棄する事である。ハマスやヒズボラと同様にグラスは一九四八年と一九六七年の間に『占領地』の区別はない。グラスにとってパレスチナの土地とイスラエル居住地の占有は、犯罪行為なのだ。イラン大統領と同様の見解である。

それから一〇年後の二〇一一年夏、ギュンター・グラスは、イスラエルのジャーナリスト、トム・セゲフ（Segev）のインタビューを受けた。セゲフは、ドイツ語が流暢なので、インタビューは通訳なしで二時間半続いた。グラスの小説『玉ねぎを剥く時（Beim Häuten der Zwiebel）』の反応についても語られた。

曰く、論議はグラスにとって極めて苦痛であった。人は彼がヒットラー親衛隊（WaffenSS）に志願したと主張したが。「実は私は、同年代の数千人と同様に招集されたのだ。」（一九二三年生まれの私の友人故ヴィンクラー（Dr.Winkler）は、WaffenSSに招集されない為に落下傘部隊に志願したと私に話していた事を思い起こせば、ヴィンクラーよりも若いグラス（一九二七年生れ）が招集された可能性はあるようだ。）

セゲフが何故『ホロコースト』が『玉ねぎ』のついでに扱われたのかと尋ねた。グラスは「狂気と犯罪は、ホロ

コーストのみに現れたのではなく、また戦争の終結で終わったのでもない。ロシアによって捕虜となった八百万人のドイツ軍人の多分二百万が生き残った。残りは抹殺された。[31]」と述べた。

罪と恥の意識に苛まされて

グラスの数字遊びを終りまで計算する為に学卒数学者である必要は無い。六百万人のドイツ軍人がロシア人に抹殺されたとされるが、実際には約三百万のドイツ軍人がソ連の捕虜となり、その中一一〇万人が死んだとされる。しかしこの実際数字が重要なのではない。何故なら、グラスにとっては実際の数字ではなく、六〇〇万人が大事なのだから。これはドイツのラッキーナンバーなのだ。六〇〇万人の死んだユダヤ人対六〇〇万人の死んだドイツ軍人で結果はゼロとなる。

グラスはユダヤ人に好意を持つ反ユダヤ主義知識人のプロトタイプなのだ。

罪と恥の意識に苛まされ、しかも同時に歴史を清算する願望に駆り立てられ、グラスは、『認識可能な危険の原因者』を武装解除する為に現れるのだ。

ドイツ人はユダヤ人が彼等に対して行った事を決して許さない。近東で究極的に平和が回帰し、ギュンター・グラスも心の平和を見出す為に、イスラエルは、「歴史になる」べきなのだ。この様にイラン大統領は言っているし、この事をこの詩人は、玉ねぎを剥きながら夢見ているのだ。[32]

ティルマン・クラウゼ

文学評論家ティルマン・クラウゼは、「グラスの〝最後のインク〟はナチスのステレオタイプに転換する」[33]のタイトルでWelt紙にグラス批判を掲載した。

何時か発生せざるを得ない反抗的爆弾発言：ギュンター・グラスの反イスラエル散文詩「言わなければならない事」は、ナチス用語に完全に調和する。

ギュンター・グラスの詩「言わなければならないこと」のシニカルなレベルに関わろうとする者は、これが反ユダヤ主義だけであったならといえる。ヘンリク・ブローダーは、何故に西側世界の三大紙に印刷された貧弱な散文詩の衣をまとったイスラエルに対する国際政治を変更する呼びかけが反ユダヤ主義的思考方式の証明であるかについて即座に望ましい明確性を以って分析した。

しかしグラスが「既に何時もイスラエル人との問題」を持っていたことは、ブローダーが証明できるように、イスラエル国家に、又全世界のユダヤ人にとっても、とりたてて驚くべきことではない。

詩の形態に注入されたこの小説家の主説で驚くべきかつ恐るべきことは、別のことである。「言われなければならないこと」をより厳密に読む者は、ナチス・イデオロギーの出自を隠蔽できない一連の思考形態及び言語形式を見出し、残念ながら、いわば著者によって「最後のインクを以って」書かれた、（つまり死に際の力を振り絞って遺言として

の）この文書が白日下に晒すものは、ここである人間がその少年時代の知的刻印から離れることができない、あるいは換言するならば、少年時代の知的刻印が今やほぼ八五歳の高齢の氏を決定的に捕まえていると言うことなのだ。[34]

今や明らかにされなければならない

テキスト全体にわたる扇動的レトリック、穿り返す反復的「何故」そして「だから」、行初に不断に繰り替えされる「何故私は沈黙するのか」、「何故私は今になって言うのか」は、ナチスの言い回しから何時かは生ぜざるを得ない周知の爆弾用語の典型で、人はあまりにも長く、「ヴァイマール体制」あるいは選択的に「ヴェルサイユの恥の平和」の屈辱と抑圧を受け入れてきた。しかし今や、それができない、今やそこから抜けなければならない。しかも生命を失っても（あるいは、「刑罰」、〝反ユダヤ主義〟の弾劾に陥っても）。

かくして一人が全ての為に立ち上がる。そしてグラスは、可能な限り「多くの人々を沈黙から解放」しようとする。これと同様の行動をヨーゼフ・ゲッペルスがスポーツホールでとった。彼のいわば長きに渡って弾圧された叫びは、「今やドイツ国民よ立ち上がれ。突撃が始まるのだ！」

イランの独裁者を無害な「アジテーター」にし、これに対しイスラエルが密にあらゆる統制から逃れる「かの国」と悪魔視され、そのひそかな陰謀は、「全てを抹殺する弾頭」の作成に耽るとする、「グラスにおける原因と結果の」不条理な転換は、致命的に、その存続が脅かされるイスラエルを侵略者と表示するパレスチナ友好的プロパガンダを

思い起こさせる。[35]

本能の力

ナチスの古い文化憎悪は、密かに羨望されかつ賞賛される文化的都市を体現するユダヤ市民を投影し、これに対し自らには、本能の力と「健全な人民感覚」のみを要求できる。グラスが、（当然無気力な）西側の「偽善」を残念に思うに対し、中核的ドイツ人たる自らに、「私はここに立ち、それ以外の事はできない」と要求する場合に、このナチス・ステレヲタイプが感じられるのだ。

ナチスによって好まれた破滅隠喩、この邪推、自らの政策への対案として完全な抹殺のみを妥当させる事も、我々がイスラエルにこれまで通り続けさせ、しかもこの国に、恐ろしいことに、ドイツの潜水艦を納入する場合、我々全てが「生き残りとして高々註（となる）に過ぎない」とグラスが脅迫的に予言する時、既にグラスの詩の冒頭に余韻が見られる。

文学的に世界的成功を収めるばかりか、一九四五年以降中心的にドイツの責任と戦争犯罪の解明に寄与してきたと主張できる著者は、どうあり得るのだろうか。

今公表された詩における如く、このような人物は、自らに、このような知的開示宣言をどの様に許すのだろうか。[36]

未だ取組むべき事はいっぱいある

しかし彼は自らにこれを決して「許さな」かった。しかし多分この長く排除された事が仕返しし、多分その古い時代に、熱狂的ナチスであった者が裏口を通って入り込むのではなかろうか。人は、ナチス・イデオロギーに対立できなかった、グラス、ヴァルザー、ヴォルフ及び他の人々が非文学的両親から生まれた事実を忘れてはならない。

これ等の小市民達と小売人達は、ナチスが共にその「世界帝国」の構築を考え、「東方の騎士園」を約束した環境である。古いエリートは、褐色の選民にとって、疑わしい存在で、弾圧され、可能な場合には抹殺された。しかしグラスとヴァルザー双方によって、「ブリキの太鼓」と「湧き出でる泉」の中で、明確に記述されたこのプロレタリア的小市民は、突然政治力あるものとなった。

この恐るべき不均衡を七〇年前と同様に、グラスの思い上がった教師的役割が告げている。[37]

フランク・シルマッハー

ジャーナリスト、エッセイスト、著述家そしてフランクフルター・アルゲマイネ紙（FAZ）の共同発行者、フランク・シルマッハーは、FAZ紙に「グラスが我々に言わんとすること」のタイトル[38]で、グラスの詩を論評している。

曰く、グラスの詩は、先ず目で、それからドライバーを以って読むことが勧められる。グラスの詩は、イケアの本棚に類似している。紙の上では全く容易に見えるが、この完成品を分解すれば、最早再組立ては不可能だ。[39]

詩の裏にある詩

人は全ての主張と同様にグラスの主説を論争対象にできる。人は、イスラエル国家が平和を危険に晒すとのテーゼを度外視すれば、グラスが孤立した意見を提示していないことを確認できる。ダヴィド・グロスマンは、同紙（FAZ）にグラスに類似する見解を述べている。[40] イスラエルのリベラル紙「ハアレス」紙は、最近イスラエルの予防攻撃に対するヒラリー・クリントン長官の警告を詳細に引用した。一瞥すれば、グラスの詩は、ノーベル賞受賞者の世界平和のためのコムニケである。[41] しかしドライバーを以って調べる者は、第二の詩を、しかも西ドイツの戦後論議の驚くべき転換を見出すことになる。

この詩は、メルケル首相が、「イスラエルの安全を保護する事がドイツの国家事由の部分である。」とする思考に全面的に対立する。[42]

詩的ラベル詐欺

それだけではない。詩全体が詩的ラベル詐欺に満ちている。グラスは次に様に述べる。

1. 私は余りにも長く沈黙した。しかし今や最早沈黙しない。
2. 私は刑罰の「強制」と不安からして、沈黙した。
3. 私は「反ユダヤ主義」で訴えられたはずだ。
4. しかし今や、全人民が根絶される計画が成されるので、発言する。

ここでは、イスラエル、イランが重要なのではなく、役割転換を行うチャンスを掴むことが重要なのだ。[43]

ルサンチマンの駄作

これは、決してイスラエル、イラン及び平和に関する詩ではない。イランのホロコースト否定者を詩行の中で「アジテーター」として無視し、しかも同時にイスラエルを世界平和の脅威と宣言することは、如何にして可能だろうか。

これはルサンチマンからする駄作であり、ニーチェがルサンチマンについて述べている様に、道徳的に終生傷つけられていると感ずる世代の「虚構的復讐」の記録である。グラスは、今やドイツがイスラエルを批判する事が許されるか否かについての論議が起こることを熱望した。

しかしこの論議は、これによって、八五歳にもなる者がその自叙伝との折合いを付けることのみのために、全世界をイスラエルの犠牲にすることが正当化されるのか否かのために行われるべきなのだ。[44]

ヨーゼフ・ヨッフェ

ジャーナリスト、著述家、国際政治エキスパートそしてZeit（週刊）紙の共同発行者、ヨーゼフ・ヨッフェは、Zeit紙に「反ユダヤ主義は外へ」[45]の見出しで、グラスの詩について論評している。

曰く、ギュンター・グラスは、考え、ジークムント・フロイトに歓声を上げさせるようなイスラエルに関する詩を書いている。何故なら、そこには氏の潜在意識への深い洞察が存在するから。

反ユダヤ主義は失せろ！　反ユダヤ主義は復活した。両者は正しい。人は、古と新を区別するために、二つの形容詞を挿入するだけで充分だ。

古い反ユダヤ主義は、実際に消え、タブーとなっている。この背景にはホロコーストがある。狂気の構造は：ユダヤ人それ自体が悪なので、消され、追放され、あるいは殺戮されるべきだ。ユダヤ人は、キリスト教徒少女の血を種無しパンに混ぜて焼くために殺す。ユダヤ人の商標は、強欲、詐欺、暴利であり、その手段は、謀議および解体である。ユダヤ人は、全能ではなく、つまり全ての悪に責任を有するので、世界支配を目指す。その最上証明は、「シオンの知者の議定書」で、これは実はロシア皇帝時代の秘密警察の駄作である。(46)

新しい反ユダヤ主義はグラスの詩から溢れ出ているように、より複雑である。何故なら、この反ユダヤ主義は、強力なタブー（恥と罪の意識）によって締め付けられる潜在意識によってインプットされているからである。しかしこの無意識は、フロイトが教えている様に、外へ出ようとする。偽善と不誠実がこれらの道を開くのだ。

人は、予め、公然たる反論とは異なり、文学の自由の保護を要求できる詩を書くことにする。人はこれによって自己救済する。当然の事に、（その武器親衛隊キャリアの百倍もの重みのある）「ブリキの太鼓」の著者は、自らを反ユダヤ主義者とは考えない。氏は「イスラエル国家と緊密なのだ」と誓っている。言わば、私の最良の友はユダヤ人なのだ。(47)

潜水艦交渉に新味無し

グラスは言う。私は最早「沈黙」できない。（選民の言葉では、「これは、未だ言う事が許されるであろう。」）氏の、つまりドイツの不幸への真の責任は、氏に発言を禁ずる全ての人々が担うのだ。氏は、これまで偽らざるを得なかった。何故なら、「強制」と「刑罰」が氏を麻痺させたからだ。「〝反ユダヤ主義〟の弾劾は周知のこと。」なのだ。反ユダヤ主義が問題なのではなく、下劣な指定、つまり真実の隠蔽を望む者達の武器としての反ユダヤ主義の烙印が問題なのだ。

内外の諸新聞に送りつけた公開の反省にグラスを強いたものは何であろうか。一見してセンセーショナルな情報：つまり「更なる潜水艦の納入」である。月並みな背景：二隻は既にイスラエルが所有。二隻は建造中。五隻目は発注。六隻目のオプションを正にイスラエルが行った。これは、数十年にわたって両国に有用な頻繁な兵器交流の一端である。

それでもなお、ドイツが常時恫喝され。「事につけては」、その過去故に、「釈明を求められ」るのだ。このアウシュヴィッツの棍棒は、周知のことであり、（右翼）国家民主党（ＮＰＤ）のパンフレットに見られる。これに全く新鮮な下劣が、当然なことに、最高の道徳的憂慮の衣をまとって続く。

この潜水艦の「特性」は、「全てを抹殺する弾頭が、唯一基すら核爆弾の存在が証明されない、場に向かって配備されている」ところにある。

しかもこれが更に次の責任転嫁の跳躍台として利用される。否！イスラエルは潜水艦をイスラエルの殲滅を約束する敵の抑止目的とする必要が無い、イスラエルは「殲滅し」、しかも「世界平和を危険に晒している」からだ。[48]

ドイツは、二回目の「犯罪の供給者」の「共同責任者」となる。つまり、第一の最終解決は、ドイツの計画。第二の計画は、ユダヤ人がイラン人に対して準備している。……

事態はより深いところにある。如何にして、知的文士が、このような思想的荒業を演出できるのか。如何にして氏は、今度はユダヤ人の演出下に次のホロコーストを想像できるのか。氏は、世界危機を両国（イスラエル＋イラン）の国際的監視によって回避しようとする。残念ながら、イラン人がその興味ある核武装部分を既存のあらゆる統制の彼方で、秘密裏に、重装備された地下格納庫で遂行している事実をグラスは認知していない。[49]

ユダヤ人が責任をとる

このような細目は重要ではない。とグラスは考える。このためには、ファスビンダーの一九七五年の演劇「ゴミ、町そして死」[50]が参考となる。

キリスト教徒たる不動産投機者ハンス・フォン・グルックは言う。「ユダ公は、我々から吸い取る。我々の血を飲み、我々を不法の座に置く。何故なら、彼はユダ公であり、我々が罪を担うからだ。彼が来た所に留まるか、あるいは我々がガス殺戮していたら、今時もっとよく眠れたはずだ。これは笑い話ではなく、私の考えなのだ。」

つまり潜水艦が需要なのではない。罪の入れ替えと自らの負担軽減が重要なのだ。イスラエルの心理学者ツィヴィ・レクスは、次のように述べる：「ドイツ人は、アウシュヴィッツでユダヤ人を決して許さない。」何故ならその存在だけで、グラスと罪無き後誕生者に対する永遠の告訴を意味するからだ。「ユダ公」は、諸タブーに囲まれており、国家となった「ユダ公」イスラエルは、ナチス・ドイツのように行動する。だからといって、ユダ公は、我々を貶め、かつ我々から潜水艦を騙し取るために、不断に「釈明を求める」べきではない。ユダヤ人は、我々が行ったことをやろうとしている。ガザは、ワルシャワ・ゲットーであり、イスラエルの核爆弾は、今回はイスラエル製でムスリムのために予約された新たな最終解決なのだ。

ユダ公が罪を担うことになれば、道徳的請求書は充足され、ナチスの人道犯罪はベルリンからテルアビブに転換する。しかもグラスは道徳的デザイナーとなるが、イスラエルが世界地図から消えることが最高である。これを主張する者は、グラスではなく、アーマディネジャドである。この運命はイスラエルがその抑止力を失うことにでもなれば、帰結をもたらす。ドイツの潜水艦は、詩人グラスが主唱しているような謀議ではない。これらの潜水艦は、グラスが「緊密に結びついている」国の終わりについて涙を流す（かもしれない）第二の詩を阻止するものなのだ。[51]

ロルフ・ホッホフート

一九三一年生まれで、【神の】代理人の著作で著名なロルフ・ホッホフートは、グラスを痛烈に批判する。

曰く、詩は時にはその作家が気付く以上に強烈に表現する事を唆す。このようにイスラエルのネタニャフ首相は

「グラスが唯一のユダヤ人国家を世界平和に対する最大の脅威と看做し、しかもこれに自衛の権利を認めない事を私は驚かない。」とコメントする。

グラスよ、君に問う。君は我々の総統が一九三九年九月一日、ポーランドへの戦争宣言に際して、世界史上の大量殺戮者の中で最も正直な者として、「欧州のユダヤ人種の抹殺」を事前公表した事を聞いたか。それ以来、イラン以外の国から、同一内容の恫喝を聞いた事があるか。ネタニヤフ氏は正しい。イランは公然とイスラエルの抹殺を以って恫喝し、ホロコーストを否定する。だから首相は、君のイスラエルとイランの同置を「恥ずべき不道徳」と看做すのだ。

疑いなくその通りなのだ！君よりも四歳しか若くない私も、一四歳までヒットラー少年団員であった。それから二日後に、ヘッセンはアメリカ軍によって解放された。私は、イスラエル人に小国として近隣核保有国によって一夜にして抹殺される事に対する唯一の確実な安全を可能にするドイツ製潜水艦の購買を禁止する君の巧妙な偽善がドイツ人として恥かしい。

君は自発的に成った者に留まっている。それは六〇年にわたって沈黙していた親衛隊員である。君はそれでも、アメリカ大統領と手に手をとって、四〇名の親衛隊員も埋葬されている軍人墓場を訪問した事を以って、コール首相に野卑な言葉を浴びせた。君ほどに完璧な偽善者はいなかった。[51a]

ダニエル・ジョナー・ゴールドハーゲン（ユダヤ系アメリカ人政治・歴史学者）

ゴールドハーゲンは、グラスの「詩」を厳しく批判する。曰く、「自らのナチスの過去と自国の偽造者として、つ

まり六百万人のドイツ捕虜（この魔術的数に注目！）がロシア捕虜収容所で死んだとする嘘の流布によってグラスの道徳的及び知的権威は、この関連でゼロに等しくなった。……ドイツやほかの国においても、イスラエルについて真実を言ってはならないとする反ユダヤ主義者によって流布されている見解が広まっている。しかしこれは、イスラエルの核兵器を指している〝一般的沈黙〟に関するグラスの主張と同様に間違っている。何故なら、イスラエルの兵器の存在に関しては、誰でもが知っており、しかも頻繁に論議されているからである。イスラエルは頻繁に、その実際の行動に対しても、又主張されている行動に対しても、アメリカ・メディア、ドイツ・メディアそして自国メディアで批判されている。グラスの詩は、事前に検閲された意識の表明でも、一般的慣例との勇気ある断絶の表明でもなく、むしろこの慣例の狡猾な表明に他ならない。間もなく完成する現代反ユダヤ主義に関する著作の作家としての私に明らかになった事実は、ドイツと欧州で公然たる反ユダヤ主義が存在していることである。その成否はどうであれ、そのことはイスラエル批判にも該当する。ドイツと欧州には、イスラエルがナチスに類似する国家であるとの見解が広まっている。同様にイスラエルがパレスチナ人に対する殲滅戦争を遂行しているとの見解も広く行き渡っている。世論調査によれば、ドイツ人の四〇％から五〇％がこのように考えている。この思考の異常性は、驚くべきことである。……ドイツ人の記憶にどどめるべき事実を要約するならば、欧州の全てのユダヤ人を消滅させる計画の下に、死の工場を構築し六百万人のユダヤ人と数百万人の非ユダヤ人を殺戮した。……更にドイツ人に記憶にとどめるべき事実は、一九九〇年から二〇一〇年の間に、イスラエル占領下にあるパレスチナ人の人口は、二倍以上となっている。何たる殲滅戦争なのか？イスラエルによるガザ地区を含むパレスチナ地域の占領政策の批判は、正当であり得る。しかしイスラエルをナチスドイツとの比較・同置は全く無意味なことだ。[516]」

マルセル・ライヒ－ラニツキ

現ドイツで最も影響力のある文学評論家マルセル・ライヒ－ラニツキは、フランクフルター・アルゲマイネ紙（FAZ）のインタビュー[52]で、グラスの詩を「忌まわしい詩」であると述べている。

曰く、これは、全てのユダヤ人に対する計画的攻撃である。ゲッチンゲンでは、ギュンター・グラスの企画した記念碑に「ギュンター！口を噤め」とペンキが塗られた。

マルセル・ライヒ－ラニツキは、ギュンター・グラスをそのイスラエル詩『言わなければならない事』に対し鋭く攻撃した。ライヒ－ラニツキは、「これは政治的及び文学的に価値のない忌わしい詩である」と述べた。

ノーベル文学賞受賞者は「世界を逆さにしている」。イランはイスラエルを抹殺しようとしている。これをイラン大統領は再三にわたって宣言し、しかもギュンター・グラスは、その反対を作詞している。この様な発表をすることは卑劣である。ライヒ－ラニツキは強調する。

曰く、この詩はイスラエルばかりか、全てのユダヤ人への計画的攻撃である。グラスは反ユダヤ主義者ではないが、ドイツ住民の中にある反ユダヤ的傾向に標的を定めた役割を演じている。従ってこの詩は私を不安にもしている。[53]

イラン：西側の『暗黙の良心』を覚醒させる

グラスの詩への礼賛はテヘランから来た。イランの文化副大臣は、争いのあるイスラエル詩に対してグラスを称賛した。シャマクダリ副大臣によれば、グラスは、これによって、人間的及び歴史的責任を模範的に果たし、この詩人による真実の暴露は、西側の『暗黙の良心』を覚醒させた。……

グラスは、その詩『言わなければならないこと』の中で、イスラエルに対し、イランに対するその政策を以て平和を危険に陥れると非難した。

その詩の中で、グラスは、イスラエルが『イラン領域で原子爆弾の構築が推定されているが故に、アジテーターに支配され、組織的熱狂へと操作されたイラン人民を消去り得る』第一攻撃権を要求していると書いている。[54]

曰く、グラスは、ドイツの犯罪、そして自らの「兵器親衛隊活動」の「鉛の衣」から自己を解放しようとした。[55]

ヴォルフ・ビアマン（作家・作詞・作曲家・歌手）

ビアマンは、Welt紙でのエッセイの中で、グラスの詩について、「これは詩ではない。」と批判の矛先をむける。[55a]

曰く、ユダヤ人国家イスラエル、しかも同時に西ヨルダンのパレスチナ人、ガザ地区の空の上に、しばらく前なら、原子爆弾の危険が迫っている。その爆弾の頭文字が〝A〟で、アーマドネジャドを意味している。この大爆弾は、“Little Boy”と言われた広島級爆弾ではなく、一発で、未解決の近東紛争の最終解決問題を終わらせ得る。……私は

最近妻と娘と一緒にイスラエルの友人を訪問した。

イスラエルでは、頻繁にイランの爆弾の危険について話し合われている。ユダヤ人は、再三にわたって脅されているイスラエル国家の殲滅を恐れている。

しかも今何が起こったのか。ドイツからペサッハ祭りに極めて不愉快なニュースが到来した。ドイツの恐ろしい悪臭爆弾が落とされたのだ。[55b]

ドイツとイスラエルは相互に繋がれている

我が悪友グラスは、イスラエルに対立し、しかもアーマドネジャドのためにスキャンダルに満ちた詩を公表した。……

私はこの挑戦的作品を三回読んだ。そして三つの言葉を私は思い出す。それは、「良い」、「苦痛」、「可哀そう」である。

1. 賢明なグラスは、私が未だ東ベルリンに生活した時は、良かった。
2. 馬鹿なグラスは、再統合（Wiedervereinigung）の語を〝e〟無き〝i〟で書いて（Widervereinigung＝統合反対）私に苦痛を与えた。
3. 混乱したグラスは、すっかり分別をなくして以来、可哀そうである。

ドイツとイスラエルは比較可能である。何故なら両国は根本的に異なっており、同時にショアを通して相互に繋がれているからである。これは私にとって単純な原則である。ドイツ人は第二次世界大戦以来あれこれしようとするが、決して再び犯行者になろうとはしない。ユダヤ人はあれこれなろうとするが、決して犠牲者になろうとはしない。そのことは、諸民族にも、個々の人間にも該当する。正に誰もが誤りの集積を有している。

ギュンター・グラスが若者としてヒットラーの兵器親衛隊の中で戦ったことは、火傷した子供であり、私を驚かせるものではない。氏がこの月並みな恥を老人として初めて明かしたことは、よく理解できる。氏がこの開示を巧妙にも期待していたノーベル賞後まで待ったことは、スエーデンにおける慢性の善人を知っている全てにとって不思議なことではない。[55c]

グラスの意見はその当然の権利

氏が中近東における唯一の民主制たるユダヤ人国家をイランにおける血に塗られた独裁制と同置するなら、それは、小説家に対し、虚栄の市場の論争における気ままな方向転換として大目に見られよう。そのようなことは起こるのだ。芸術家にオリジナルなアイデアが浮かばない場合、若干の人は、グラスの様に、不自然なタブー破りを試みるのだ。

それどころか私は、氏のイスラエルに関する無知からする旧式の虚偽の権利さえ擁護する。私は、我々すべてを生かす言論の自由の名において、氏を重い心で擁護する。氏が短略な怒りにまかせて三、四回にわたり、ついに口を開

き、勇気ある仕立て屋であることを自慢しても、民主体制においては、幸いなことに、金をとられることにはならない。氏が世界に対し、ついには民主国家イスラエルが数十年前からアメリカ、イギリスおよびフランスと全く同様に、核兵器を持っているという平凡な真実を述べる場合、氏は公開秘密を漏らしていることになる。

ここイスラエルで私と話す全ての人々は同じことを話す。イランの核工場に対する攻撃は、極めて危険なばかりか意味がない。何故ならこのような軍事攻撃は問題を解決せず、先送りするだけで、しかも長期的には先鋭化するからだ。この事実を知り、かつ公然と発言する者は、イスラエルの小説家、アモス・オズ、マイアー・シャレフおよびダヴィド・グロスマン、そして怒れる詩人、ナタン・ツァッハである。

ドイツのネオナチ達がグラスを抱きしめる事実がこの作家をナチにするわけではない。グラスは、決してナチスではなかったし、一九四四年若い親衛隊員としてもファシストではなかった。そしてイランの宣伝機関が氏を賛美するとしても、その事は、氏をターバンの中の爆弾を伴ったモスレムマンガにするわけではない。つまり全てが、そんなに深刻なことではないのだ。[55d]

詩の女神は笑い転げる

それでもなお、親愛なるグラスよ、コメントは言わなければならない。

これは詩ではない。ギュンター・グラスがその不器用な散文詩を最後に切り刻み、我々に対して、その文字破片を

上下に設定し、しかも人類に自由なリズムとして、無韻の抒情詩として売り出すことは、グラスの侮辱的なほら事に他ならない。これは文学的死罪に値する。

小説について私は理解が少ない、あまりに理解が少ない。しかし詩について、もしそれが私にとって異様で、あるいは腹立たしい仕草で描かれる場合に、私も気付くのだ。しかしグラスの怒りの爆発は、氏が間違っていようが正しかろうが、深くあるいは浅薄に考えられようが、詩（Gedicht）ではなく、考えられたもの（Gedacht）である。

ギュンター・グラスは、若いころに有力な小説家であった。しかし氏は、その遅い試みを以てしても詩人とはならないだろう。

今や全てが氏を攻撃する。ジャーナリストは、版を享受しなければならず、政治家達は再選を果たそうとし、氏の同僚達は、真の妬みと怒りから、攻撃する。それどころか氏の賛美者達は、驚愕して氏から離れる。そして氏は、反抗的に自らを守り、そして反抗的にそのノーベル威信の中に閉じこもる。

しかしギュンター・グラスは、最悪の悪から逃れられない。詩の女神、美しきエラトは、この鈍感な政治ゲテモノについての笑いと痛みで転げまわるのだ。[55e]

インゴ・シュルツェ

作家インゴ・シュルツェは、フランクフルター・アルゲマイネ紙（FAZ）の中で「解決は、全面的軍縮のみがもたらし得る」[56]の見出しで、グラスを擁護する極めて少ない者達の一人として、論陣を展開する。

「ドゥルス・グリュンバイン[57]への反論」の形式でインゴ・シュルツェは、ギュンター・グラスの詩に関する論争がドイツの闘争文化について多くを述べているとして、以下の様に述べる。

考えられないことが予測された事象となる

対話の拒否は、個人的に辛い。同時に私にとって、グラスの詩を巡る論争に対して、しかも我々に係る事項について公開で論争することの困難に対し象徴的のように思われる。何故なら、人が『言わなければならない事』に何を対峙し得るにしても、このテキストは、戦争しかもドイツにも直接的・間接的に係る戦争の危険について、政治家の発言によって到達するよりもはるかに広い公衆に到達するチャンスを提供するからである。討論の中で、コンテキストの欠落として非難されていること、その存続権に於けるイスラエルの脅威が補足され、誇張され、あるいは間違っているとされることがより詳細に把握されえる。しかし同時に、イスラエルがイランの核施設を破壊する為にいわゆる予防攻撃を計画していること、しかもドイツが兵器納入を通してこれに間接的に参加している事実も排除できないことも重要である。

この様な攻撃が如何なる帰結を伴うかについては何人も確実に言うことは出来ない。しかしいずれにせよこの攻撃は破滅的であろう。例え核の破滅が回避されたとしても、この計画されている予防攻撃は、有効ではなく、しかも唾棄すべき手段である事実は変わらない。テレビ報道で拡散されたイラク核施設の写真は、イラク戦争の前地で見た写真を想い起させる。望むと否とにかかわらず、これらの写真の再現は、予防戦争への思惑に対して考えられない事が正に予測される結果とする慣れと言う結果と為る。[58]

ギュンター・グラスは最早人として尊敬されない攻撃対象か

当然のことにイランが核兵器保有国となる事は誰もが望んでいない。しかし問題は、如何にしてこの目標への到達が可能かである。我々は、一方で核兵器の兵器庫を容認し—今日まで正式には存在しない—、他方からはこれを行わないことを要求するのか。解決は、全面的軍縮と強者である限り攻撃を控えることに固執することでしかあり得ない。……

イランへの攻撃は、イランの野党を益々脆弱化する。しかし内部からの持続的変化が、永続的この地域に平和をもたらし得る。しかも我々が忘れてはならない事実は、住民を自らの所有者の如く扱うイラン現政権に西側もその共同責任を担っている事である。何故なら、アメリカとイギリスによる民主的に選挙されたモハマド・モサデッグ首相の一九五六の転覆とシャーの就任無しには、多分イランの現在とホメイニは無くて済まされたはずだからである。

ドイツは、イスラエルに対するその責任、そしてパレスチナ人およびこの地域の諸国に対する責任に基づき、思慮

無き、しかも無条件の兵器供給を許可しない義務がある。ギュンター・グラスのテキストは、これらの諸問題について賛同又は反対の発言を行う為の動因と成り得る。

私は、たとえ『言わなければならないこと』に反対するとしても、市民および同僚としての、氏を人格として最早尊重しない攻撃に対してギュンター・グラスを守る事が呼びかけられている。私は、何処でも、「消えろ！インゴ・シュルツェ」、「消えろ！ドュルス・グリュンバイン」を読みたくない。[59]……

Ⅳ．ドイツ政界の反応

大半の政治家と知識人は作家ギュンター・グラスに距離を置くか、あるいは批判的である。グラスはこの詩を以て喧しい反ユダヤ論争を引き起こした。[60]

根強い批判を以て、知識人と圧倒的多数の政党の政治家は、ギュンター・グラスのイスラエル批判の詩に反応した。

ルプレヒト・ボレンツ（ＣＤＵ）（連邦議会の外交委員会委員長）

ボレンツは、Welt紙で、『グラスは偉大な作家である。しかしその政治判断を以て、氏は全く正鵠を射ていない。』と述べた。更に、「グラスは原因と結果を取り違えている。」とボレンツは述べる。更にボレンツは、国際法に違反し、イスラエルの存在を危険に晒すのはイランであり、イスラエルがインドやパキスタンと同様に、核不拡散条約を調印

していない事実を指摘する。

ポレンツによれば、誰もがイスラエルが核兵器を有している事実から出発しているが、この事実がイランとの紛争の原因ではない。「グラスは、存在しない関連を設定している。」

更にポレンツは「ドイツ・イスラエル関係はグラスの発言によって負担を掛けられてはいない。我々はこの「詩」を過大評価すべきではない。」とも述べる。曰く、イラン・イスラエル紛争は、極めて衝撃的である。国際共同体は現在政治解決の努力を続けている。その目標はイランの核爆弾の阻止である。[61]

ヘルマン・グロェーエ（キリスト教民主同盟（CDU）事務局長）

グロェーエによれば、この「詩」は、核兵器を目指すイランがイスラエルの存続権に反対し、ホロコーストを否定し、自らの核エネルギー構想の国際統制を拒否している事実を全く誤認している。[62]

フィリップ・ミスフェルダー（キリスト教民主・社会同盟（CDU／CSU）院内スポークスマン）

ミスフェルダーは、「この詩は、悪趣味で、非歴史的、しかも近東情勢についての無知を証明している。」、「イスラエルは、アラビア人の諸権利及び女性の諸権利を実現可能にするこの地域の唯一の国である。これを侵略者の役に陥れる事は間違っている。」と述べる。[63]

ロルフ・ミュツェニッヒ（ドイツ社会民主党（ＳＰＤ）対外政策エキスパート）

ロルフ・ミュツェニッヒは、Welt紙で、紛争を間違って理解しているとグラスを非難し、イラン大統領アーマドネジャドを『アジテーター（ほら吹き）』と呼ぶ事は自国の野党を弾圧する暴力の実態に鑑みて、危険な「瑣末視」であり、グラスの詩は、政治的に有効ではなく、『戦争の狂気』の緩和に寄与しないと述べる。[64]

アンドレア・ナーレス（ドイツ社会民主党（ＳＰＤ）事務局長）

アンドレア・ナーレスは、Spiegel誌で、「近東の現状に鑑みて、グラスの詩は、『混乱させ、かつ不適切」と思われると述べた。[65]

グイド・ヴェスターヴェレ（自由民主党（ＦＤＰ）、連邦外相）

ドイツ連邦政府の最初の閣僚として、グイド・ヴェスターヴェレは、イランとの核紛争におけるイスラエルの態度に対するグラスの批判を撥ねつけた。[66]

曰く、イラン政府との争いは、敵対、イデオロギー及び先入見の遊びではなく、苦渋の真剣さを意味する。我々は、政治的解決のための努力を以て外交的ガラス球演技を行っているのではなく、平和維持を目的として我々のパートナー諸国と共に、ドイツとヨーロッパにとって極めて重要な地域において危機的な展開への正しい回答を見出そうとしている。

我々は全中近東を核兵器無き地帯とする事を目指している。イランは核エネルギーの非軍事利用の権利を有してい

るが、核武装への権利は有しない。

イランが発する脅威を過小視する者は、現実を拒否する者である。

核兵器を持つイランは、重大な帰結を持つ事になる。そうでなくとも危険に晒されているこの地域の安定性は、完全に終わることになる。これによって統制不可能な軍備競争が開始される。全世界規模の安全保障構造は不安定化する。

イランの手中にある核兵器は、イスラエルの安全に対する脅威とも成る。その事は、我々の責任あるドイツの対外政策にとって特別の憂慮の根拠である。[67]

何故ならドイツはイスラエルにおける人々に対する歴史的責任を有しているからである。しかし我々をイスラエルと結びつけるそれ以上のものが存在する。それは、真の価値の共有である。

我々は、この地域における唯一の真に機能する民主制と共に個人の諸権利、自由、責任への信仰と法治国家を分かち合っている。我々は、戦闘的民主制を伴ってこの諸価値を共有している。イスラエル議会では、ドイツ連邦議会よりも強烈に討論されている。しかもその民主制は外からの批判も耐えうる民主制である。私は、イエルサレムで私のイスラエルの外相との共同記者会見でイスラエルの入植政策を明確な言葉で批判した。

同様の事は、イランでは考えられない。イスラエルとイランを同一の道徳レベルに置くことは機知に欠けるばかりか、不合理である。[68]

フォルカー・ベック（緑の党院内部長）

ベックは、グラスを批判し、「熟慮無き対イラン軍事攻撃につきイスラエル政府に警告が発せられなければならない。しかしイスラエル国家を告発してはならない。」、「グラスは、その『詩』の衣をまとったイスラエル批判を以て、反ユダヤ主義のプロトタイプを体現し、イスラエル批判がタブーであるとし、これによって、この『詩』は、討論への寄与としての資格を失う。[69]」

ドイツ連邦政府：本件では「芸術の自由が妥当する」

連邦政府は、この「詩」について控え目に表明した。「ドイツでは、芸術の自由が妥当する。しかも幸いにも、必ずしも、全ての芸術作品について、発言する必要のない連邦政府の自由も存在する。[70]」と述べた。

ヴォルフガング・ゲールケ（左派党の連邦議会議員）

ゲールケは、グラスを守る側に立った。曰く、グラスは（批判する）権利があり、しかもこれによってドイツ政治を正した。「ギュンター・グラスは、大幅に沈黙されている事項について発言する勇気を有している。[71]」

V．イスラエルの反応

ベンジャミン・ネタニヤフ（イスラエル首相）

ネタニヤフ首相は、グラスの陰険なイスラエル批判の後、転換された事実を指摘する必要に迫られ、以下の様に述

べる。

「ショア【大量殺戮】を否定し、イスラエルの抹殺を呼びかけるイランとイスラエルとのグラス氏が行った比較は、イスラエルについてではなく、グラス氏自身について多くを語っている。イスラエルではなく、イランこそが世界の平和と安全に対する脅威を提示している。グラス氏は、武器親衛隊としての過去に六〇年も沈黙していた。従って、氏が世界で唯一のユダヤ人国家を世界平和に対する最大の脅威と看做し、この国に自衛権を認めない事は、驚くべきことではない。[72]」

エリ・イシャイ（イスラエル内相）

イシャイ内相はグラスを「好ましからざる人物」として入国禁止を宣言した。

「グラス氏をこの聖地への入国を禁止する事は、私の名誉と看做す。グラスへのノーベル文学賞授与は剥奪されるべきである。グラスの発言は、究極的にはホロコーストに導いた反ユダヤ主義的煽動に類する。人はこのような言葉に鑑みて、グラスが反ユダヤ主義的人間であり、親衛隊ユニフォームを着ていた人である事実に沈黙することができない。グラスは、イスラエルの国家と人民に対する憎しみに火を注ぐことを目指し、しかもこのようにして、氏が親衛隊ユニフォームを着て支援していたイデーを維持しているのだ。[73]」

Ⅵ．グラスの心理的背景

グラスの詩を巡る氏の行動の心理的背景については、これまで、多くの識者が説明を試みているが、極めて明快な

説明と見做されるものが、以下に紹介するトム・セゲフが二〇一一年九月一二日ドイツ Welt 紙に発表した「ギュンター・グラスがホロコーストについて実際に述べた事」[74]である。

トム・セゲフ（イスラエルの歴史学者・ジャーナリスト）

最近ギュンター・グラスがナチス人民殺戮をソ連のドイツ捕虜と比較したとする氏の発言が広がっている。これを明らかにする。

ギュンター・グラスは、正式にイスラエルに招待された最初の作家であった。一九六七年三月であった。六日戦争の三カ月前であったが、イスラエルはこれを予測していなかった。我々の大部分は、内政的討論、なかんずくドイツ人に対する適切な観点についての熱狂的討論問題の贅沢を享有していた。

イスラエルとドイツは、その二年前（一九六五年）に外交関係を樹立したが、野党的学生組織は、ドイツの代表者たちと協力しないと決議した。イスラエル政府の招待でグラスが来た時、この学生達は、イエルサレムに於ける彼らのクラブで話させる決定をした。これは稀有な例外であった。『ブリキの太鼓（Brechtrommel）』の作家は、「良きドイツ人」と見做されていた。

私が司会した。この催しはメディアの注目を誘い、しかも若干の緊張も生ぜしめた。私服警察が壁の前に待機した。

私の記憶する限り、この催しは成功した。グラスは我々に強い印象を与えた。我々は氏を全うで、しかも胸襟を開いた者として受入れ、その際に氏は我々に取り入る試みはしなかった。[75]

「あなたと再会できてうれしい」

四四年後、私はギュンター・グラスの名前を持つリュベックの博物館に通じる木製階段を上った。ここで氏は時折仕事をし、客を迎えている。一九六七年の我々の出会いについて知らされていることが分かった。『貴方と再会できてうれしい』、氏のいたずらっぽい微笑みは極めて好感を抱かせ得るものであった。

「ハアレッツ（Ha'aretz）紙」のインタビューは、『玉ねぎを剥く時』のヘブライ語版の発刊に因んで行われた。この著書が二〇〇六年に発刊されて以来、全世界で論評され、イスラエルも例外ではなかった。それどころかグラスは、イスラエル公衆への書簡を向け、これまで氏が幾度となく繰り返した事を述べた。氏のヒットラー親衛隊（WaffenSS）への短い強制兵役は、ヒットラーとナチズムへの氏の少年時代の熱狂のコンテキストと理解すべきで、その際に、戦後におけるグラスの政治的・道徳的関与が看過されてはならない。

「最重要メッセージ」

『私は若くそして愚かなナチであった。』とグラスは私に言い、しかも氏の戦争体験の更なる関連、とりわけある国家イデオロギーを疑問視することなく受け入れる危険を認識する事を私に強いた。氏によれば、この著書の中心的

メッセージは、政治的疑念である。つまり私が考えるに、実際に価値ある最重要メッセージなのだ。

従って私は、世界のどこかおける制服を着た人間、例えばパレスチナ領域に於けるイスラエル兵士が、自らの経験から何を学ぶ事ができるのかとグラスに問うた。グラスは、あらゆる偽善的な助言をこらえた。

曰く、合法的行為と犯罪行為間の境界は、しばしば曖昧である。若くかつ未経験な兵士は、上司たる将校が戦争犯罪を強いない事を願わなければならない。

残念ながら、イスラエルのパレスチナ領域占領は、恒常的かつ組織的人権侵害の結果を招いている。軍隊の側からのより大きな疑念は、実際望ましい事だ。

「未だ他の秘密はあるのか」

我々がグラスの自叙伝の一般的メッセージについて詳細に話し合った後、明らかに他の事項についても話す事があった。確かに氏がヒットラー親衛隊にいた数カ月について話す事が苦しいとグラスの秘書は警告を発していたが、しかし今回氏はイスラエル紙と話している事実を意識していた。氏が依然として受け身的態度を採った事実は私にとって意外であった。従って私は、部屋から追い出される危険にも拘らず、多分氏が依然として隠している他の秘密が存在するか否か尋ねた。氏はこの問いをチャーミングな微笑みを以てかわした。

それでもなおこのインタビューは何時でもスムーズに行われたわけではない。グラスは時には私に対して声を荒げた。とは言っても、私は氏のナチの過去に対する次の説明を要求する為にも、また何故に氏が自らの過去をかくも長きにわたって隠していたかを発見する為にも来たわけではなかった。私自身は氏のケースからして、人がその人生に於いて可能な限り早く、しかも確実に国際的に尊敬される道徳的聖像となる前に自己を明かす事が最善である事を知っている。[76]

「ドレスデンの六〇周年以来」

私は、この著書を読んで特別に腹を立てなかった。これに対し、私の気分を損ねた事は、ドイツ人をとりわけ犠牲者として提示するグラスの公然たる傾向である。この傾向は、ドレスデン爆撃の六〇周年記念以来、グラス自身の著作「癌の経過（Krebsgang）」の結果、ドイツにおいて観察される。

その他の文化的及び政治的諸指標もドイツ自身の悲劇に対する意識の増大を示している。皮肉な事に、この変遷を明確化する多くの著作、その中「癌の経過」もヘブライ語に翻訳された。これらのいくつかは、イスラエルのベストセラーリストに挙げられている。

『ドイツには一四百万人の難民がいた』

私が更にドイツの犠牲者的役割について問いただした時、グラスは答えた。

「狂気と犯罪は、その表明をホロコーストに見出したばかりか、戦争終結を以て終わったのではない。ロシア人の捕虜とされた八百万人の兵士の中、多分二百万人が生き残った。その他の全ては抹殺された。ドイツには一四百万人の難民が存在した。領土の半分は直接ナチスの恐怖政治から、共産主義恐怖政治に転換した。私はこの事をユダヤ人に対する犯罪の比重を少なくする為に言っているのではない。しかしホロコーストは唯一の犯罪ではなかった。我々はナチスの犯罪責任を担って行く。しかしその犯罪は、ドイツ人にも深刻な破局を付与し、かくしてドイツ人は犠牲者となったのだ。」

私の感じからして、これは正当な論拠である。勿論八百万のドイツ戦時捕虜はいなかった。私は、これを正すべきであった。彼の意図する事は「多くの」と言う意味であった。いずれにせよグラスは、如何なる時点においても、ホロコーストを過小評価するとか、あるいは六百万人の殺戮されたユダヤ人に類似して、六百万人のドイツ人犠牲者の神話を創設する意図は持たなかった。

「平均的なドイツ人」

それでもなお私は、敢えて言うならば、「玉ねぎを剥く時」をドイツの犠牲役割に関する一つのサガと読み取った。この様にグラスは、自らの「兵器親衛隊」所属を指摘するはるか以前に、自己の家族の殉教と戦争に於ける子供時代の苦しみについて述べている。何故にナチスがユダヤ人を憎むのか理解できない女―その後その女は現れる事が無い―が無から現れる。明らかにその女は、悪意を持たない『平均的な人』を体現すべきとされている。(77)

ヒットラー殺害未遂とノルマンデーでの同盟諸国の攻撃は、グラスの親衛隊所属指摘以前に、ドイツ諸都市への爆撃、ベルリンで女性であふれた教会に火を付けたソ連兵士と同様に指摘された。グラスは、人々が欧州全域から「兵器親衛隊」に志願した事実の指摘を忘れていないし、また、「癌の経過」からのヴィルヘルム・グストロフも再活動化されている。

最後に自らの兵役に到達し、氏は自身とその同僚が体験した実際に非人間的な残忍な訓練を記述する。私は、その記述が「兵器親衛隊」が犯した最悪の犯罪ではなかったとコメントした。これに対してグラスは怒り狂って、「私はそのような主張はしていない。」と反論した。氏はそのような主張はしていない。

「自己憐憫が記憶を圧倒する場合」

氏の報告によれば、氏が見た最初の死体は、木にぶら下がって揺れ動くドイツ軍兵士のそれであった。氏が体験したロシア軍攻撃は、氏とその同僚達に、白樺の木陰で鳥の囀る多分特別牧歌的瞬間であった。氏の親友の一人はハーモニカを吹いていた。グラスは攻撃後の散乱した身体部分を記述し、どれがハーモニカの少年のそれに所属するかを自問した。

この著書を読むにつれ、グラスだけではなく、全ドイツ国民が犠牲者となり、従って、同情に値することになる。

全ての国民は、ドイツ国民を含めて、自らの悲劇を思い起こす権利を持つ。しかしその際に、自らの犯罪に対するドイツの責任が自己憐憫によって圧倒される危険が存在する。(78)

Ⅶ．グラスの主張の正誤

九節六九行に及ぶグラスの詩は、ある意味で『タブー破り』と見做されているが、この中でグラスは、イランに対するイスラエルの事前攻撃に警告を発し、しかもイスラエルを世界平和に対する危険とも表示している。以下、グラスの詩の中で主張されている内容を八テーゼに要約し、その正誤について検証を試みる。(79)

第一テーゼ：図上作戦の中でイランに対する事前攻撃が演じられている。

正：グラスが述べているように、これまでアメリカでもイスラエルでもイランに対する事前攻撃の図上演習が行われている。ニューヨーク・タイムズの三月報道によれば、アメリカ軍のシミュレーションがイランの核施設へのイスラエルの軍事攻撃が地域戦争の勃発を引き起す結果となる。更に四月には、イスラエルの複数紙がイスラエル軍の図上演習の結果、イランとの戦争で三〇〇人以下の死傷者の発生が予測されると報道している。

第二テーゼ：事前攻撃は『イラン人民を抹消し』得る。

誤：イランは八千万人弱の人口を擁する。イスラエルを含めて世界のどの軍事力であってもイラン人民を抹殺することはできない。イラン政権及びその核施設に対する軍事攻撃は、核兵器によるものではなく、通常兵器によるもの

と理解され、しかもその様な図上演習が行われている。この攻撃の際に、非戦闘員（民間人）が巻き込まれる危険が憂慮されているが、『イラン人民の抹殺』は明らかな誇張である。

第三テーゼ：イスラエルは統制下にない核戦力を増強している。

情報諸機関や観察者の評価によれば、イスラエルは一九六〇年代の終わり頃から、核兵器を有している。核開発に際しては南アフリカ連邦政権と協力したとも報じられている。しかしイスラエルは、現在まで核の保有を公式には追認していない。従って核戦力の質量に関しては正確な数字が公表されず、五〇から五〇〇発の核弾頭の存在が推定されている。イスラエルは、国益に反するとして、核不拡散条約にも国際原子力機構（ＩＡＥＡ）にも加盟していない。その限りで、これらの条約及び機構の統制下に置かれていない。これに対し、イランの原子力プログラムは、国際原子力機構の統制下に置かれている。情報諸機関の評価によれば、イスラエルの核兵器は、周辺の敵対諸国に対する抑止を目的としている。その意味で、イスラエルの核兵器は、国連安全保障理事会常任理事国（米英仏ロ中）及びインド・パキスタンの核兵器のステータスと本質的に異なっていない。従って、イスラエルが統制下にない核戦力を増強している事実があるとしても、前記の核兵器保有七カ国と比べ、取分けイスラエルを危険視する理由は見出され得ない。

第四テーゼ：前記の事実を指摘する者は、「反ユダヤ主義」の嫌疑下に置かれる。

誤：イスラエルならびに世界のメディアでは、イスラエルとイラン間の紛争について活発な論議が行われている。

その際に、イスラエルに不利な論調のたびに「反ユダヤ主義」のレッテルが貼られる事になれば、言論統制と成り得る。しかしそれはドイツにおいてさえも事実ではない。グラスは、寧ろこのように主張する事によって、予め自分に「反ユダヤ主義」のレッテルが張られないように配慮したようである。しかし、これには必ずしも成功していない。(80)

第五テーゼ：ドイツはイランを攻撃する核弾頭を装備できる潜水艦をイスラエルに供給する。

ドイツ連邦政府はこれまで三隻のドルフィン型潜水艦をイスラエルに納入し、更に本年中に三隻納入を予定している。潜水艦はそれぞれ四発の巡航ミサイル装備が可能である。軍事専門家の説明によれば、この潜水艦は主に核の二撃能力の維持を目的としている。これによってイスラエル軍は、イランの核攻撃に対して、反撃が可能となる。ドイツ政府は、この潜水艦が抑止に奉仕する事を以て、この販売を正当化している。

第六テーゼ：イランの原子爆弾の存在は証明されていない。

正：西側諸国の情報諸機関は、原子爆弾の完成まで少なくとも一年を必要とする事から出発している。パネッタ・アメリカ国防総省長官の主張によれば、イランは爆弾の運搬システムの完成まで更に二年を必要としている。クラッパー情報局長アメリカ議会での証言で、イランが核兵器構築に対する疑問無き証拠が存在していないと述べた。本年三月末イランの核プログラム交渉団のかつてのスポークスマンは、ボストン・グローブ紙にイランが核爆弾完成の一歩手前に到達していると述べた。

第七テーゼ：イスラエルは世界平和を危険に陥れる。

誤：イラン政権はこれまで再三にわたって遅かれ早かれ地図から消えてしまう『シオニズム占領政権』と表示している。これに加えイランは、イスラエルの存続権を否定し、ユダヤ国家と戦うパレスチナのハマスとレバノンのヒズボラを軍事的に支援し続けている。イスラエルも数年以来イランの核施設への軍事攻撃を公然と明らかにし、アメリカの支援を要請し続けている。イスラエルが世界平和を危険に晒すとするグラスの非難は、極めて大衆迎合的かつ一方的でありイランのイスラエル威嚇を全く無視している。

第八テーゼ：ドイツは「犯罪の供給者」となり得る。

誤：ここでもグラスは大衆迎合的論調を表明している。グラスはここでイスラエルの可能なイラン攻撃が原則的かつ例外なく現行国際法違反を構成する事から出発している。しかし国際法的に事態はより複雑である。抽象的には、先制軍事攻撃は原則的に許されるとされ、これに対し予防的軍事攻撃は原則的に違法とされている。しかし、何が先制軍事攻撃で何が予防的軍事攻撃であるかについては、明確な定義・区別が示されていない。現在においても、国際刑事裁判所規約において、「平和に対する犯罪」について諸国間の合意が示されていない。手続的には、平和の破壊について国連安全保障理事会が決定することが可能であるが、しかしその決定は五大常任理事国の合意を前提とする。この様な現状からして、グラスが行うように、イスラエルを一方的に『世界平和を危険に晒す』国と表示し、しかもイスラエルに潜水艦を納入するドイツを「犯罪の供給者」と表示する事は、極めて非説得的かつ幼稚であり、国際政治における無知をさらけ出している。

おわりに

ノーベル文学賞受賞作家ギュンター・グラスの詩『言わなければならない事』は、ドイツでなかんずくイスラエルとの関係を巡って、強烈な論争を巻き起こした。ホロコースト、過去（ナチス犯罪）の克服、反ユダヤ主義、ドイツ国家のイスラエルへの責任等々様々な諸問題が再び論議の対象となった。これらの諸問題は、それぞれの内容からして、短期に解決できるものではない。

ともあれ、二〇一二年五月末、ガウク・ドイツ連邦大統領は、ペレス・イスラエル大統領の招待に応じ、イスラエルを公式訪問した。訪問中にガウク氏は、パレスチナ人との平和プロセスを居留地政策に於いて『シグナル』を通して新たに活性化することを呼びかけた。

ガウク大統領は、まさに政治的に騒然としている時期に、ドイツのイスラエルとの緊密な関係を明確化する目的を以てイスラエルを訪問した。曰く、「イスラエルの安全と存続権を擁護する事は、ドイツの政治の為に決定的事項である。イスラエルの存続権を脅かす諸勢力にドイツは決定的に対決する。[81]」

ペレス大統領は、ガウク大統領を心から歓迎し、「平和の為に全力を捧げた妥協なき民主主義者」であると位置づけた。これに対し、ガウク大統領は、イスラエルの和解意欲に感謝し、『ドイツとイスラエルが、現在これまで以上に緊密な関係にある。』と述べた。

ペレス氏は、ガウク氏に対し、強烈な言葉を以て、イランの核兵器への野心に対する自国の憂慮を明らかにした。

曰く「イラン大統領は、新たなショア（＝ホロコースト）を以て脅している。これは我々の血を凍らせる。[82]」

イスラエル指導部は、再三にわたって、イランの核武装を緊急の場合軍事的に阻止する事を明らかにしている。ガウク氏は、ドイツがこれからも核紛争を外交的に解決する努力を続けると述べている。

ガウク氏の訪問中に、グラス氏の争いのある詩が問題とされた。『ハーレッ紙』のインタビューで、ガウク氏は、「グラス氏は、氏の個人的見解を述べた。これは許される。私は明示的に氏に賛同しない。[83]」と述べた。

会談の後ペレス氏とガウク氏は、ホロコースト記念館を訪れ、ガウク氏は、以下の様に記帳した。「忘れてはならない！決して！そして、生きる事が許されなかった人々をここで思い起こすこの国の側に立て。」

両国の友好関係は、将来もこの様な形で継続することが望ましいと看做されよう。

（1） Henryk M.Broder, Günter Grass, der ewige Antisemit, in: Welt Online vom 4.4.2012 参照。
（2） Clemens Wergin, Natürlich darf man Israel hierzulande kritisieren, in: Welt Online vom 7.4.2012 参照。
（3） Clemens Wergin, 註（2）(2012), S.1 参照。
（4） Clemens Wergin, 註（2）(2012), S.1 参照。
（5） Clemens Wergin, 註（2）(2012), S.1 参照。
（6） Clemens Wergin, 註（2）(2012), S.1; グラスに関わるメディア批評については、なかんずく、Clemens Wergin, Abhärtung unserer Seelen, in: Welt Online vom 7.4.2012 参照。
（7） Clemens Wergin, Günter Grass'seltsames Verhältnis zu den Fakten, in: Welt Online vom 5.4.2012 参照。
（8） Clemens Wergin, 註（7）(2012), S.1 参照。
（9） 旧東独作家の言を踏まえたもの。消滅した東独は最早歴史的には『註』の中での存在になったとの言説。

(10) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.1 参照。
(11) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.1f. 参照。
(12) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.2 参照。
(13) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.2 参照。
(14) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.2f. 参照。
(15) （淀みなき言葉で）（立て板に水の如く）
(16) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.3 参照。
(17) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.3 参照。
(18) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.4 参照。
(19) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.4 参照。
(20) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.4f. 参照。
(21) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.5 参照。
(22) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.5 参照。
(23) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.6 参照。
(24) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.6 参照。
(25) Clemens Wergin, 註(7) (2012), S.6 参照。
(26) Henryk M.Broder, Günter Grass – Nicht ganz dicht, aber ein Dichter, in: Welt online vom 5.4.2012. なおここでブローダーは、dicht と Dichter の結びつけでグラスを皮肉っている。
(27) Henryk M.Broder, 註(26) (2012), S.1 参照。
(28) Henryk M.Broder, 註(26) (2012), S.1 参照。
(29) Henryk M.Broder, 註(26) (2012), S.1 参照。

(30) Henryk M.Broder, 註(26)(2012), S.2 参照。
(31) Henryk M.Broder, 註(26)(2012), S.2 参照。
(32) Henryk M.Broder, 註(26)(2012), S.2f. 参照。
(33) Tilman Krause, Grass "letzte Tinte" transportiert NS-Stereotypen, in: Welt Online vom 4.4.2012
(34) Tilmann Krause, 註(33)(2012), S.1 参照。
(35) Tilmann Krause, 註(33)(2012), S.1 参照。
(36) Tilmann Krause, 註(33)(2012), S.2 参照。
(37) Tilmann Krause, 註(33)(2012), S.2 参照。
(38) Frank Schirrmacher, Was Grass uns sagen will, in: FAZ vom 4.4.2012
(39) Frank Schirrmacher, 註(38)(2012), S.1 参照。
(40) Krieg ohne Sieger, in: FAZ vom 3.12.2003; Anna Hirsch, Der Rufer in der Wüste, in: FAZ vom 11.6.2012; Neinsagen ist keine Politik: David Grossmann kritisiert Israel, in: FAZ vom 8.7.2012; Felicitas von Lovenberg, Worte als Wegweiser, in: FAZ vom 10.10.2012 参照。
(41) Frank Schirrmacher, 註(38)(2012), S.2 参照。
(42) Frank Schirrmacher, 註(38)(2012), S.3 参照。
(43) Frank Schirrmacher, 註(38)(2012), S.3f. 参照。
(44) Frank Schirrmacher, 註(38)(2012), S.5 参照。
(45) Josef Joffe, Günter Grass: Der Antisemitismus will raus, in: Zeit Online vom 4.4.2012（ユダヤ系ドイツ人）
(46) Josef Joffe, 註(45)(2012), S.1 参照。
(47) Josef Joffe, 註(45)(2012), S.1f. 参照。
(48) Josef Joffe, 註(45)(2012), S.2f. 参照。

(49) Josef Joffe, 註(45) (2012), S.3 参照。

(50) Rainer Werner Fassbinder, Der Müll, die Stadt und der Tod/Nur eine Scheibe Brot. Zwei Stücke, Frankfurt a.M.1998; Janus Bode, Der Fassbinder-Kontroversen; Entstehung und Wirkung eines literarischen Textes. Zu Kontinuität und Wandel einiger Erscheinungsformen des Alltagsantisemitismus in Deutschland nach 1945, seinen künstlerischen Weihen und seiner öffentlichen Inszenierung, Frankfurt 1991 参照。

(51) Josef Joffe, 註(45) (2012), S.3f. 参照。

(51a) Rolf Hochhut, Ich schäme mich als Deutscher, in: Welt Online vom 7.4.2012 参照。

(51b) Daniel Jonah Goldhagen, Der grusse Gleichmacher, in: Welt Online vom 7.4.2012; ders., Grass – Ignorant oder berechnender Zyniker?, in: Welt Online vom 7.4.2012 参照。

(52) Marcel Reich-Rnicki über Grass: Es ist ein ekelhaftes Gedicht, in: FAZ vom 8.4.2012; 参照。（ユダヤ系ドイツ人、強制収容所の生残り）

(53) Reich-Rnicki sprcht von “ekelhaftem Gedicht” in: Welt Online vom 7.4.2012, S.1 参照。

(54) Reich-Rnicki, 註(53) (2012), S.1f. 参照。

(55) Marcel Reich-Rnicki, 註(52) (2012), S.4 参照。

(55a) Wolf Biermann, Stümphafte Prosa. Eine literarische Todsünde, in: Welt Online vom 8.4.2012

(55b) Wolf Biermann, 註(55a) (2012), S.1 参照。

(55c) Wolf Biermann, 註(55a) (2012), S.1 参照。

(55d) Wolf Biermann, 註(55a) (2012), S.1f. 参照。

(55e) Wolf Biermann, 註(55a) (2012), S.2 参照。これに加え、文学評論家ヘルムート・カラセックは、グラスを「ノーベル文学賞搾取者」として痛烈に批判する。Hellmuth Karasek, Nobelpreis is “erschlichen”, in: Focus Online vom 14.8.2006; ders., Vielleicht will Grass ja wieder Wahlkampf führen, in: Welt Online vom 5.4.2012; ders. Günter Grass will Israel Wegdichten,

in: Welt Online vom 7.4.2012: 更に本年左派党の推薦で連邦大統領に立候補し、落選したジャーナリスト、ベアテ・クラルスフェルトもグラスに対する厳しい批判を行う。Klarsfeld attackiert Grass mit Verweis auf Hitler, in: Welt Online vom 6.4.2012; 外国メディアの反応については、“Ist der alteDeutsche plötzlich zurückgekehrt?” In: Welt Online vom 6.4.2012 参照。

(56) Ingo Schulze, Eine Lösung kann nur allseitige Abrüstung bringen, in: FAZ vom 17.4.2012

(57) Durs Grünbein, Zum Fall Grass: Er ist ein Prediger mit dem Holzhammer, in: FAZ vom 11.4.2012. グリュンバインは、イスラエル詩に関して、ギュンター・グラスを感覚に盲目で、しかも尊大な、かつ戦闘的道徳主義者であると批判する。

(58) Ingo Schulze, 註(56)(2012), S.2f. 参照。

(59) Ingo Schulze, 註(56)(2012), S.3f. 参照。その他グラスの擁護者としては、クラウス・シュタェク・ベルリン芸術アカデミー会長が挙げられる。なお、グラス批判に対する本人の反論およびその批評に関しては、Günter Grass wirft seinen Kritikern Rufmord vor, in: Welt Online vom 5.4.2012; Grass entgegnet Kritikern mit Nazi-Terminologie, in: Welt Online vom 5.4.2012; Henryk M.Broder, Ein autoritärer Knochen spielt verfolgte Unshuld, in: Welt Online vom 6.4.2012; Matthia Hoenig, Medien-rummel im Hause Grass – Kritik weltweit, in: Welt Online vom 6.4.2012 参照。

(60) Claudia Ehrenstein, Grass erntet Entrüstung für anti-isuraelisches Gedicht, in: Welt Online vom 4.4.2012; Günter Grass liegt daneben, in: Welt Online vom 5.4.2012; Günter Grass verweckselt Ursache und Wirkung, in: Welt online vom 5.4.2012 参照。

(61) Claudia Ehrenstein, Grass erntet, 註(60)(2012), S.1f. 参照。

(62) Claudia Ehrenstein, Grass erntet, 註(60)(2012), S.2 参照。

(63) Claudia Ehrenstein, Grass erntet, 註(60)(2012), S.2f. 参照。

(64) Claudia Ehrenstein, Grass erntet, 註(60)(2012), S.2 参照。

(65) Claudia Ehrenstein, Grass erntet, 註(60)(2012), S.2 参照。

(66) Guido Westerwelle, Israel und Iran auf eine gleiche moralische Stufe Zustellen ist absurd, in: Bild am Sonntag vom

8.4.2012; Grass-Kontroverse, Westerwelle weist Kritik an Israel zurück, in: FAZ vom 8.4.2012; Debatte über umstrittenes Gedicht: Westerwelle nennt Israel-Vergleich von Grass absurd, in: Spiegel Online vom 8.4.2012 参照。

(67) Guido Westerwelle, 註(66) (2012), S.1 参照。

(68) Guido Westerwelle, 註(66) (2012), S.1f. 参照。

(69) Claudia Ehrenstein, Grass erntet, 註(60) (2012), S.2 参照。

(70) Claudia Ehrenstein, Grass erntet, 註(60) (2012), S.2 参照。

(71) Claudia Ehrenstein, Grass erntet, 註(60) (2012), S.3 参照。

(72) „Der judenfeindliche Schwanengezang eines brillanten Geistes, oder ein Schrei der Wahrheit?“, in: Welt Online vom 7.4.2012, S.2 参照。

(73) „Umstrittenes Gedicht: Israer verhängt Einreiseverbot gegen Günter Grass“, in: Spiegel Online vom 8.4.2012; „Empörung über Grass: Israels Innenminister verlangt Aberkennung des Nobelpreises“, in: Spiegel Online vom 8.4.2012 参照。なお入国禁止の準拠法は、なかんずく、かつてのナチスであった人物の入国禁止を目的とする法律とされている。なおイスラエルの入国禁止措置をグラスは、かつてのドイツ民主共和国（DDR）の国家安全省（Stasi）と比較し、イスラエルの措置によっても、氏の「イスラエルへの記憶を消去る事ができない」と述べている。“Persona non grata: Grass vergleicht Einreiseverbot mit DDR-Methode, in: Welt Online vom 11.4.2012 参照。グラスに批判的な識者の相当数は、イスラエルの入国禁止措置に賛同していない。

(74) Tom Segev, Was Günter Grass wirklich über den Holocaust sagte, in: Welt Online vom 12.9.2011; Ders., The German who needed a fig leaf, in: Haaretz.com. 8.26.2011 参照。

(75) Tom Segev, Was Günter Grass--, 註(74) (2011), S.1f. 参照。

(76) Tom Segev, Was Günter Grass--, 註(74) (2011), S.2f. 参照。

(77) Tom Segev, Was Günter Grass--, 註(74) (2011), S.3 参照。

(78) Tom Segev, Was Günter Grass--, 註(74)(2011), S.4 参照。
(79) Christoph Sydow, Israel-Iran-Konflikt: So falsch liegt Günter Grass, in: Spiegel Online vom 4.4.2012 参照。
(80) Henryk M.Broder, Günter Grass, der ewige Antisemit, in: Welt Online vom 4.4.2012; Ders., Grass macht Antisemiten endlich modern, in: Welt Online vom 11.4.2012 参照。
(81) „Gauk verlangt von Israel Zeichen in der Siedlungspolitik“, in: Zeit Online vom 29.5.2012.S.1
(82) „Gauk verlangt...“ 註(81)(2012), S.2 参照。
(83) „Gauk verlangt...“ 註(81)(2012), S.2 参照。